大学体育研究　46：77 － 85，2024

第 31 回 FISU ワールドユニバーシティゲームズ 水球競技報告

坂上輝将[1)]

Report on 31th FISU World University Games, Water Polo

Hiroyuki SAKAUE[1)]

1. はじめに

2023 年 7 月 27 日から 8 月 7 日にかけて，第 31 回 FISU ユニバーシティゲームズ・男子水球競技（以下，2023 成都）が中国・成都にて開催された。この大会は，以前はユニバーシアード競技大会という名称で開催されており，「大学生のオリンピック」と呼ばれることもある由緒正しい大会であり，2 年に 1 度開催されてきた。また，水球競技では大学生年代の大会において最も大きな国際大会であり，日本水球界としても大学生年代の強化・育成における最も重要な大会として認識されている。FISU ユニバーシティゲームズ男子日本代表（以下，ユニバ男子代表）は，2019 年ナポリ大会において，過去最高 5 位入賞を果たしている。その後，新型コロナウイルス感染症の影響により 2021 年成都大会が延期，翌年 2022 年はロシア侵攻に伴う影響により延期となり，ようやく 2023 年に開催することができた経緯や，初の学生選手のみで参加することとなったことも踏まえ，2023 成都では，ベスト 8 以上を目標に大会に臨んだ。

本大会には，筑波大学水泳部水球部門から木之下歩夢（体育専門学群 4 年），嶋本和真（体育専門学群 4 年）が選出され，筆者もコーチとして帯同し，指導にあたった。本稿では，コーチの立場から見た 2023 成都について報告する。

2. 代表選手選考・重点強化策

選手選考は現場のコーチングスタッフである監督：中嶋 崇光氏（日本体育大学），コーチ：砂子阪 誠氏（富山県立富山北部高校），筆者の 3 名で実施した。

2023 成都に臨むユニバ男子代表選手を選考する上で，2 度の延期による影響は避けられないものであった。本来 2021 年に開催されるはずだったところが，2 度の延期によって 2 年後である 2023 年に開催された経緯から，出場選手の年齢制限の変更が実施された。本来，大会開催年の 1 月 1 日時点で 17 歳以上 28 歳未満であり，大学・大学院に在学中，もしくは開催年前年に大学・大学院を卒業した選手が出場する資格を有するとされていたが，今回は特例措置として，上記に加えて 2020 年に大学・大学院を卒業した選手までが出場できることとなった。しかしながら，今回の 2023 成都においては，世界水泳と日程が重複していることと若手選手の育成という観点から，初の学生選手のみでの選考とする方針となった。

2023 成都に向けた強化活動は，日本代表候

1）筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

補合宿にユニバ代表候補も招集し一貫指導の中で選手選考を進めた。また，昨年の学生リーグ戦・インターカレッジ・日本選手権も対象試合とし，各強化活動内でのパフォーマンスと対象試合でのパフォーマンスを評価し，シーズンの始まる4月上旬に登録メンバー13人，予備登録メンバー3人を決定した。

本大会は大柄な欧米諸国の選手に対抗するために，現日本代表と同じディフェンスシステムを採用した。このディフェンススタイルは，ボールを保持するプレーヤーに積極的にプレッシャーをかけると同時に，周囲のプレーヤーがパスラインに出て相手プレーヤーの動きを制限することでパスミス・パスカットを誘発し，カンター攻撃に繋げるということを主目的している。欧米強豪国は，ゴール前の選手を中心とした攻撃で退水を誘発し，パワープレーでの得点を狙いとしている。日本との体格差を考えたとき欧米諸国が行なうようなゾーンディフェンスでは到底通用しないため，日本独自のディフェンスシステムを構築する必要があった。この，パスラインデェフェンスは海外では「JAPANプレス」とも言われ強豪国からも警戒される日本の武器であり，パスラインデェフェンスによりカウンターアタックの出現率を大幅に上げることができ，超攻撃型の守備とも言える。体格差を不利としないために，スピードを活かしたカウンターアタックの数的有利な状態からアーリーオフェンスに移行し攻撃を継続することが得点チャンスに繋がると考えた。

しかし，この戦術を確実に遂行するためには常に泳ぎ続ける泳力が必要となるため，強度の高いトレーニングが必須条件となる。そのため，各所属での練習の際にも技術習得だけではなく常に高強度トレーニングに努めるように周知した。

3. 本大会までの代表合宿

登録メンバー13人，予備登録メンバー3人が決定し，強化日程が示された（表1）。

大会までの合宿は，7月21日（金）～7月23日（日）に実施された。日本体育大学健志台キャンパス（神奈川県横浜市）にて実施し，日本体育大学（ユニバ男子代表選手を除く大学1～4年生のチーム）と戦術練習や試合形式の練習を実施した（図1）。今年度より，新デザインのボールがAQUAでは採用されているが，ユニバとアジア大会は旧デザインのボールで実施された（図2，3）。練習球の使い分けなど課題は多かったが，合宿を通して選手同士のコ

図1　合宿の様子

表1　本大会までの代表合宿

日付	合宿日程	主な活動
7月21日	攻防練習	一部練習
7月22日	戦術練習（セットOF、DF・カウンター等）	二部練習（AM：練習、PM：練習）
7月23日	戦術練習（退水セット・カウンター等） 強化試合：日本体育大学	二部練習（AM：練習、PM：試合）

ミュニケーションの深まりや代表としての意識の高まりを感じた。合宿を経て本大会に臨む最終メンバー 13 人が確定した。

4．本大会

(1) 日程

2023 成都におけるユニバ男子代表の主な日程は表 2 の通りであった（表 2）。

図 2　旧デザインボール

図 3　新デザインボール

表 2　大会日程と主な活動

日付	大会日程	主な活動
7月24日		移動日
7月25日		一部練習（PM：練習）
7月26日		二部練習（AM：練習、PM：試合） 韓国との強化試合
7月27日	グループ予選　1試合目	VS ドイツ
7月28日		一部練習（PM：練習） 開会式
7月29日		一部練習（PM：練習）
7月30日	グループ予選　2試合目	VS ハンガリー
7月31日		一部練習（PM：練習）
8月1日	グループ予選　3試合目	VS ギリシャ
8月2日	グループ予選　4試合目	VS シンガポール
8月3日		フリー
8月4日	準々決勝	VS イタリア
8月5日		一部練習（PM：練習）
8月6日	5～8位決定戦	VS ドイツ
8月7日	7位決定戦	VS 中国
8月8日		
8月9日		
8月10日		移動日

(2) 現地の環境と到着から初戦まで（7 月 24 日～7 月 27 日）

ユニバ男子代表は，7 月 24 日に合宿が行われていた日本体育大学健志台キャンパスを出発し，直通の飛行機がない関係で羽田空港から関西国際空港に移動したのち，夕方 16 時 10 分の飛行機で日本を出国した。20 時頃に四川空港に到着し，入国手続きを済ませてバスで移動し，選手村である成都大学（図 4）には 22 時頃の到着となった。選手村に関して，宿舎は 2 人 1 部屋で空調の効きもよく，部屋内に洗濯機があり，非常に便利であった（図 5）。また，宿舎から徒歩 1 分ほどに朝 5 時～深夜 1 時まで開いている食堂（図 6）があり，そこでは様々な料理と飲み物を自由に摂取できた。出発前は現地での食事面で苦労することを想定していたが，日本でも馴染みのある洋食も数多く用意されていたことに加えて，最も懸念された生野菜も十分食べられるものであった。翌日以降の練習場所に関しては，選手村からバスで 30 ～ 45 分ほどの屋内プールを予約するシステムであった。移動は送迎バスが手配されたため，快適なものとなった。

7 月 25 日は，午前中は休養に充て，夕方に 1 時間ほど練習を実施した。7 月 26 日は，午前に練習用プールで 1 時間半・午後に試合会場で 1 時間練習を行った（図 7，8）。午後の練習の際には，試合会場のメインプールで韓国と練習試合を実施した。現地入りしてから初めての対外試合であったが，韓国に対して持ち味の堅守からの速攻を軸に終始優位にゲームを進め，勝利することができた。韓国はサイズがあまり大きくなく，技術・戦術のレベルも上位国のそれとは大きな差があるようなチームではあったが，いつもとは違う環境の中での試合を経験することができ，本来の力を発揮することができたという意味では，非常に有意義なものであっ

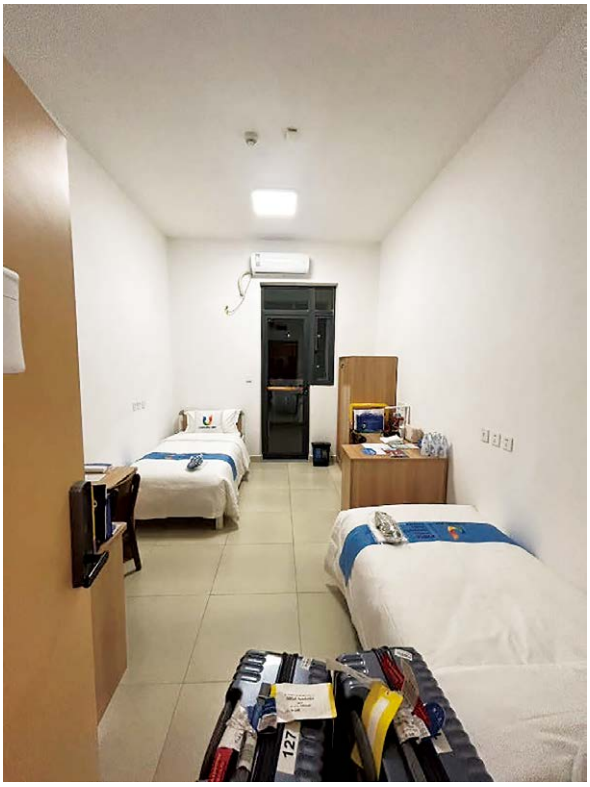

図 5　選手村の部屋

図 4　選手村の宿舎

図 6　選手村の食堂

たと感じられる。

7月28日は，午前中に前日の試合の反省を踏まえて練習を実施し，夕方には開会式に参加した（図9）。

図7　練習用プール

図8　試合会場のメインプール

図9　開会式

(3) 予選リーグ（7月27日～8月2日）

第1戦

ドイツ　(6, 1, 3, 4) 14－8 (3, 1, 3, 1) 日本

第2戦

ハンガリー　(5, 4, 5, 3) 17－6 (1, 2, 1, 2) 日本

第3戦

ギリシャ　(6, 7, 3, 6) 22－11 (3, 3, 3, 2) 日本

第4戦

シンガポール (1, 3, 0, 3) 7－22 (8, 3, 5, 6) 日本

初戦，昨年の世界選手権のメンバー8人を有するドイツとの対戦。相手のサイズとフィジカルを活かしたプレーをなかなか止めることができずに試合が進み，第1ピリオドを3－6でリードされるが，第2ピリオドで粘りの守備を見せピリオドを1－1とし，第3ピリオド途中に日本の連続得点で6－8の2点差まで詰め寄ったが，第4ピリオドに体力・集中力が切れたところで一気に畳み掛けられ，3連続失点。点差をつめるように懸命にプレーしたが，残念ながら8－14で敗れた。

予選2試合目は強豪ハンガリーとの対戦。第1ピリオド，個人技で打開される展開が続き，ハンガリーの攻撃を抑えることができず5連続失点。相手の強力な攻撃をなかなか防ぐことができず，強豪国ハンガリーの力をみせつけられる中，何とか得意のカウンターアタックやドライブ攻撃等で退水を取り得点をするものの，思うように得点を重ねることができず，6－17で敗れた。

3戦目のギリシャ戦は，第1ピリオド日本が先取点を奪い，幸先の良いスタートとなり，主導権を譲らず粘り強く戦い，途中まで3－1でリードする展開となった。しかし，その後ミスから連続失点しピリオドを3－6で終えた。第2ピリオド，相手に1点決められた後，日本の選手が偶然相手選手の顔に手を当ててしまい，VAR判定の結果，退場となり，日本は4分間1人少ない6対5の状態で試合をすることになった。格上の相手に1人少ない状態で失点を防ぐ

ことは困難であり，6対6の状態に戻った際には，3－12と大きくリードされる展開となった。第3ピリオド，何とかピリオドを同点としたものの点差を縮めることができず，第4ピリオドに点差を広げられ，11 － 22で敗戦という結果となった。

予選最終戦。シンガポールとの戦い。今大会まだ未勝利の日本チームは，悲願の1勝に向けて全員水球で挑んだ。第1ピリオド怒涛の攻撃とGKを中心とした素晴らしいDFで8－1と大量リードし，ほぼ試合を決めた。第2ピリオド，少し攻撃力が鈍った日本は3－3とピリオドを同点としたが，前半を11－4の大量リードで終了。後半，今一度日本らしいスピード感ある攻撃をし，丁寧なDFを心がけたところ，最終的には22－7で今大会初勝利をおさめ，グループ予選を1勝3敗で終え，Aグループ4位となった。

(4) 準々決勝・5－8位決定戦（8月4日～8月7日）

準々決勝

イタリア(4, 4, 7, 7)22－9(2, 3, 2, 2)日本

5－8位決定戦

ドイツ　(4, 4, 2, 4)14－12(2, 3, 2, 5)日本

7位決定戦

中国　(0, 4, 1, 4) 9－7(2, 1, 0, 4)日本

最終順位：8位

準々決勝戦。Bブロック1位の強豪イタリアとの戦い。第1ピリオド幸先よく先取点を奪うものの，その後ミスから連続失点したが1点奪い返し，1ピリオドを2－4で終えた。第2ピリオド，GKを中心とした粘り強いDFから勢いに乗り，得点を重ね，4－5の1点差まで詰め寄った。その後，3連続失点したものの，1点を返し前半を5－8で折り返す。ここから逆転と後半戦を迎えたが，強豪国イタリアの力をみせつけられ，思うように得点できず，第3ピリオド，第4ピリオドとも2－7とされ，終わってみれば9－22という屈辱的な敗戦となった。

5－8位決定戦。予選リーグにおいて敗戦したドイツと5位決定戦進出をかけての対戦。世界選手権のメンバー8人を有し，予選リーグで対峙した際に日本のパスラインディフェンスを一度経験し警戒している相手に対して，第1ピリオド，3連続失点をしたものの得意のカウンターアタックに活路を見出して，2連続得点し，ピリオドを2－4で終えた。第2ピリオド，一進一退の攻防が続き，前半を5－8で折り返す。点差を縮めたい中で迎えた第3ピリオド，序盤に2連続失点で点差を広げられるが，ピリオドを2－2の同点とし，3点差のまま最終4ピリオドへ。序盤からドライブやカットインで相手の退水を誘発し得点を重ねるが，相手も強力なセンターフォワードを軸とした攻撃で得点を決め，取っては取られての展開が続き，前半でついた3点差を埋めようと戦ったものの，最後追いつくことができず，12－14の惜敗を喫した。

本大会最終戦となる7位決定戦。初対戦の開催国である中国戦は，今までとは違う雰囲気での試合となった。中国は開催国として上位進出を期待されながら，なかなか思うように結果を残せず，これ以上負けるわけにはいかない状況であった。それに加えて日本戦ということもあり，会場は中国への大声援で，壮絶な空気感の中で試合が行われた。その空気感も相まって，試合は激しいコンタクトの応酬となり，熾烈な肉弾戦が繰り広げられた。第1ピリオド，日本が退水から先取点を奪い，得意のカウンターアタックで追加点をいれ，2－0とリードで終了。第2ピリオドも日本が得点し3－0としたが，その後ミスから連続失点し，前半を3－4で終えた。後半，日本が中国の気迫に押されてしまい得点することができず，逆に1失点し，第3ピリオドは，3－5とした。最終ピリオド，先制点を決め1点差とするも，日本はジリジリとビハインドを広げられてしまい，懸命に戦ったが追いつくことができず7－9で惜敗した。この結果，日本は第8位で本大会を終えた（図10，11，12）。

5. 大会を振り返って

(1) 国際経験の必要性

今大会を振り返って，最も感じることは「国際経験の必要性」である。近年はコロナ禍のため国際ゲームが思うように開催されていなかった背景もあり，出場選手は極めて国際経験に乏しい状況であった。コロナ禍の明けた今，大学生年代の強化のためには彼らに海外経験を積ませることが急務であると感じた。先述の海外経験とも関わるが，やはりこれまで培ってきた経験値の差は大きいように感じた。特に，流れがどちらにも傾いていない場面で，相手は堅実なプレーを積み重ねていくのに対して，こちらは焦って雑なミスをしてしまい，主導権を譲ってしまうシーンが多く見受けられ，これは若いメンバー構成が起因しているように感じた。しかしながら，次大会に向けて貴重な経験を積むことができたというポジティブな側面でもある。さらに，今大会において優勝したイタリアや第２位であったハンガリー，世界選手権のメンバー８人を有するドイツといった強豪国と試合を行うことができた（表３）。

図 10　試合の様子

図 11　試合の様子

図 12　ユニバ男子代表チーム集合写真

日本は，今大会を通して世界上位の国と数多く試合をすることができ，貴重な経験を積むことができたと言える。次回大会に向けて，今大会の出場選手を軸に強化を進めながら，その他の選手にも海外経験を積ませることで，今大会で感じた経験値の差は充分に補うことができると考えられる。

参加国全体での得点内訳を見てみると，今大会を通してユニバ男子代表はセンターフォワードでの得点がなかなか上がらず，対戦国と比較して最下位であった。体格で劣っている欧米諸

表３　大会最終結果

最終順位	国名
優勝	イタリア
第2位	ハンガリー
第3位	ジョージア
第4位	アメリカ
第5位	ギリシャ
第6位	ドイツ
第7位	中国
第8位	日本
第9位	スロバキア
第10位	韓国
第11位	シンガポール

国との対戦において，得点源となる 6–5 の数的有利な状況での得点（Extra player shots）とカウンターアタックでの得点（Action shots）については，それぞれ 11 チーム中 7 位と 6 位であった（図 13）。

Extra player shots と Action shots は生命線になるため，この数値の向上は急務である。もちろん各選手のシュート力を向上させることも重要である。

(2) ゴール前での戦い

今大会を通して苦しみ続けた点が，ゴール前での戦いである。上述したようにユニバ男子代表は，センターフォワードでの得点が対戦国と比較して最下位であった（図 13）。センターフォワードは OF における要であり，日本よりも平均身長が大きく上回る欧米諸国のチームの中で最も体格が大きい選手が担うポジションである。サイズの小さい日本は，センターフォワードにおける劣勢が顕著であった。この課題を解決するために，各選手のフィジカル面とコンタクト意識の向上はもちろんであるが，特に OF 面においては，多様な攻撃の構築と習得・DF 面においては，相手の大きな選手に対して複数人でケアする意識づけが必要であると感じた。大会を通して，欧米諸国相手に善戦した試合は，DF の際のセンターフォワードへのケアが上手くいっており，そこからカウンターアタックに繋がる流れができていた。しかしながら，大会を通して一貫してこの動きができていたわけで

Overall (Preliminary + Final Rounds)

Goals and shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	ITA	8	136	255	53.3%
2	HUN	7	116	231	50.2%
3	GRE	7	107	233	45.9%
4	GER	7	101	222	45.5%
5	GEO	8	99	250	39.6%
6	USA	8	90	190	47.4%
7	JPN	7	75	215	34.9%
8	CHN	8	74	231	32.0%
9	KOR	7	64	184	34.8%
10	SVK	7	52	204	25.5%
11	SGP	6	33	110	30.0%

Penalty shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	GEO	8	13	17	76.5%
1	GER	7	13	20	65.0%
3	GRE	7	9	14	64.3%
3	HUN	7	9	12	75.0%
3	ITA	8	9	15	60.0%
3	USA	8	9	14	64.3%
7	CHN	8	7	9	77.8%
7	JPN	7	7	10	70.0%
9	KOR	7	5	11	45.5%
9	SGP	6	5	6	83.3%
9	SVK	7	5	8	62.5%

Centre shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	GER	7	18	27	66.7%
2	HUN	7	13	23	56.5%
2	ITA	8	13	21	61.9%
4	GEO	8	12	25	48.0%
4	GRE	7	12	26	46.2%
6	USA	8	8	12	66.7%
7	CHN	8	5	18	27.8%
8	KOR	7	4	9	44.4%
8	SGP	6	4	7	57.1%
8	SVK	7	4	14	28.6%
11	JPN	7	3	7	42.9%

Extra player shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	ITA	8	51	72	70.8%
2	GEO	8	36	73	49.3%
3	CHN	8	32	72	44.4%
3	HUN	7	32	51	62.7%
5	GRE	7	31	65	47.7%
6	USA	8	28	57	49.1%
7	GER	7	26	53	49.1%
7	JPN	7	26	53	49.1%
9	KOR	7	20	41	48.8%
10	SVK	7	13	39	33.3%
11	SGP	6	10	16	62.5%

Action shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	HUN	7	62	144	43.1%
2	ITA	8	61	144	42.4%
3	GRE	7	50	119	42.0%
4	USA	8	45	107	42.1%
5	GER	7	42	117	35.9%
6	JPN	7	39	143	27.3%
7	GEO	8	38	135	28.1%
8	KOR	7	34	118	28.8%
9	SVK	7	30	142	21.1%
10	CHN	8	29	128	22.7%
11	SGP	6	13	80	16.3%

6m shots

Rank	Team	Matches Played	Goals	Shots	%
1	GRE	7	5	9	55.6%
2	GER	7	2	5	40.0%
2	ITA	8	2	3	66.7%
4	CHN	8	1	4	25.0%
4	KOR	7	1	5	20.0%
4	SGP	6	1	1	100.0%
7	HUN	7	0	1	0.0%
7	JPN	7	0	2	0.0%
7	SVK	7	0	1	0.0%

図 13　参加国の得点ランキング

はなく，相手のセンターフォワードに苦しめられ続けたため，複数人でケアする意識づけを継続して取り組み，OF においては体格差に左右されないために多様な攻撃の構築・習得の必要があると感じた。

6. おわりに

2023 成都は 1 勝 6 敗で 8 位と，2019 年ナポリ大会の過去最高 5 位にはなれなかったものの，初の学生のみの派遣で目標としていたベスト 8 を達成することができた。先述したように，今回の課題として挙げられた「経験値」や「多様な攻撃の構築・習得」の部分などを強化していき，今大会の経験を貴重な「財産」として今後に繋げ，次大会である 2025 年ドイツ大会で成果を上げられるよう継続して研鑽していく必要がある。また，今大会を経験した選手たちが，各々感じた自信や悔しさを糧に，さらなる活躍と成長を見せてくれることに期待したい。

最後に，このような機会を提供していただいた水球関係者の皆様をはじめ，代表活動にご理解とご協力をいただいた筑波大学体育系の関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

図 14　2023 ユニバ ID 証